

# ソーントン・ワイルダーの アイデンティティ

木村 淳子

I. ソーントン・ワイルダーについての評価は、国の内と外とではかなりのちがいがあのように思われる。アメリカにおいては、ワイルダーは最もアメリカ的でない作家と見なされて来た。その中には1930年代のマイケル・ゴールドのように、彼を反アメリカ、又は非アメリカ的な立場にある作家であると、きわめてはげしい論調で批判した批評家もいるし、彼を同時代人として論じる、穏やかなマルカム・カウリーもいるのであるが、総じてアメリカの批評家達はワイルダーの作品の中に、彼等の時代のものとは異なる世界を見出して来た。異なる世界というのは、一つにはワイルダーの作品が、時代も距離も遠く隔る場所を舞台にとることが多い、ということであり、そのような世界で展開される物語というのがきわめて閉鎖的な社会とそれを構成している人々による物語であり、二つにはワイルダー独特とも云える、現在を超えて、過去から未来へとつながる大きな時間の中でとらえられる物語であり、人間ドラマであるということである。リアリスティックな風潮の中では、アナクロニズムと見なされがちでもある。アメリカの批評家達はワイルダーの幼少年期の体験が他のアメリカの作家達のそれとは全く異なっていたことを指摘する。すなわちアメリカ国内に在って、アメリカの日々を生きて育ったのではなく、外側からアメリカを眺めながら育ったことに、彼等はワイルダーの他の作家とは異っていることの原因を見出そうとする。ところがヨーロッパの批評家の中には、たとえば、ドイツの批評家ヘルムート・パピジ

ウスキーなどに云わせると、ワイルダーはピューリタンの作家、ヤンキー気質をそのまま写し出している作家ということになる。興味深いことに、アメリカの批評家達は申し合せたように、彼等のワイルダー批評の第一章を彼の生い立ちの記で始めているのであるが、パパジウスキーはこれを最終章に記している。アメリカの批評家達はワイルダーの幼少期の体験の相違を作風の相違に結びつけようとしているのであり、パパジウスキーはこれにはあまり重要性を見出してはいない、とも云えそうである。身近かに、間近かに眺める者には、小さな相違が大きなものに、海を隔てた向うから眺める者には、小さな相違などは消えて、かえって同質性が見えてくるものであろうか。Thornton Wilder<sup>(1)</sup>の中でパパジウスキーは、ワイルダーの作品を *The Cabala* から *The Eighth Day* に至るまで一つ一つをていねいに分析する。そして云うには、例えば *The Bridge of San Luis Rey* に関しては、作中人物のジュニパー修道士の努力について次のように云っている。

In his present task, he believes that everything can be decided by a discussion of the question of good and evil. The discussion of good and evil, and — parallel to it — reward and punishment, played a not inconsiderable role in early American intellectual history, and, in secularized form, continued to do so in later times.<sup>(2)</sup>

つまり彼はジュニパー修道士の行動の中に初代のピューリタン達から現在に至るアメリカ人の行動のパターンを見出しているのであるし、ジュニパー修道士が苦心して作り上げた、人々の性質、行動の善悪の度合いを示す表に、ピューリタニズムから由来すると考えられるプラグマティズムを見出している。(恐らくこの表は、フランクリンの自叙伝中の例の徳目表を思わせるものである。)

ワイルダーの作品がどのように読まれようと、彼が正真正銘のアメリカ

カ人であって、まぎれもなくアメリカの伝統を受けついでいることは明らかである。しかも彼には、文学的な思想傾向としては対極的とも見える、ローマン主義的な傾向とネオ・クラシックな傾向の両方が見られる。文学史的には、ローマン主義運動のアメリカ型とも云うべき超絶主義は、前代のネオ・クラシズムに対する必然的な反動として捉えることができるものである。もちろん、これはきわめて粗難な単純化であることは充分承知の上である。しかし、19世紀のアメリカ・ルネッサンスの華々しい開花は17世紀、18世紀のイギリス文学の模倣期を経て、その影響を脱して、アメリカ独自の文学の樹立を旨とする運動であった。この運動がもたらしたローマン主義、ないしはローマン主義的傾向は、その後アメリカ文学の大きな底流となっている。人間の取り得る視点は、つきつめて行くとローマン主義的傾向とネオ・クラシズム的傾向のもとに大きく分けられるものであり、アメリカ文学は概してローマン主義的傾向をより強く帯びているようである。ワイルダーにはこの二つの視点、又は傾向があることは、マルカム・カウリー<sup>(3)</sup>も認めている。一見矛盾に充ちているようであるが、このあたりにワイルダー文学の秘密がありそうである。

Ⅱ. マルカム・カウリーが指摘する、ワイルダーにみられる超絶主義の影響の具体的なあらわれは、作品の中に必ずと云ってよいほど姿を見せる、行動即生であるような人物達である。彼等を、みずからも行動の人であった H. D. ソロウのエッセイをもじって、「散歩者」と呼ぶのは的を得ぬことではないと考える。

比較的初期の作品での「散歩者」の代表格は、*Heaven's My Destination*<sup>(4)</sup>の主人公ジョージ・ブラッシュである。もともとこの作品は、前作 *The Woman of Andros*<sup>(5)</sup> に対する批判に報いるために書かれた作品と云えるものである。舞台となっているのは、1930年代の不況下

のアメリカであり、主人公ジョージ・ブラッシュは旅まわりの教科書のセールスマンである。ワイルダーはこの人物を創造するにあたって、彼の父、兄そして彼自身の幾分かをもって肉づけしたと云われるが、文字通りの“walker”（散歩者）であるジョージ・ブラッシュの生活の信条は、終始聖書の教えを実践すること、なのである。日曜日は聖日である。故にブラッシュは、どのような事態にも決して仕事はしない。彼は彼には不当と思われるような利益は求めない。例えば銀行預金が生み出す利息が正当であるなどとは聖書のどこにも見当らない故に、彼は利息を受け取することを拒否し、挙げ句の涯に留置場に入れられるようなはめに陥る。あるいは、ブラッシュは魂の平安を求めて無言の行を実行する。動機は立派であっても、彼の行為は人々には理解できない類いのものであり、彼は裁判にかけられる。完全な隣人愛の実践は強盗に加担し、愛すべき老婦人を恐怖のどん底につき落すような結果を生む。ワイルダーはジョージ・ブラッシュを完全に戯画化してしまっているのである。しかし、それはワイルダーが心底からの皮肉をもって、冷笑的に彼を眺めていることにはつながらない。それどころか戯画化して眺める目の底にあるのは、大きな人間愛とでも云うべきものである。というのは、はた目にはこっけいなほどの信念の人ジョージ・ブラッシュにも、己れの行動に対する信を失ない、存在の意義を見失なう時が来る。つまり彼が愛さなければならぬ義務を負っていると考える人から、愛を拒絶された時である。

One day he arose to discover, quite simply, that he had lost his faith. It was as though in some painless way he had lost his arms and legs.<sup>(6)</sup>

精神的な損失は肉体的な損失を伴なう。ブラッシュはすべての希望を失なって、死の床に伏してしまう。一切の人間の絆を断ち切って、自己のからの中に閉じこもってしまったブラッシュの心を開かせたのは、下

宿の女主人、クレイヴン夫人の手紙と、彼女の手を介して送られて来た、パスツィェフスキー神父の形見のスプーンだった。人の手によって閉ざされた扉は、人の手で再び開けられたのである。やがて24才の誕生日を迎えようとするブラッシュは、一年前と同じ場所で誕生日を迎えようと再び旅立つ。彼の内心には、一年前の彼の胸中に燃えていたと同じ、強く、激しい信仰の炎が燃えている。彼は信仰の求めに応じて、信念をつらぬくべく行動を開始するのである。

……the manager and guests of Bishop's Hotel at Tohoki, in the same state, were astonished to discover that one of their number, a tall solidly built young man, had suddenly lost the use of his voice and was communicating with the outside world by means of pencil and paper. Several days later, in Dakins, Kansas, the same traveler was arrested and confined for a few hours in the jail. The charge was later found to have been based on a misunderstanding. He was released and continued on his journey.<sup>(7)</sup>

最新作 *Theophilus North*<sup>(8)</sup> は、主人公のセオフィラス・ノースの年令と、彼を旅立たせた動機が、ジョージ・ブラッシュの後を受けているように見える作品である。ノースはワイルダー晩年の「散歩者」の代表である。ノースは20代も終りの青年教師で、彼が旅に出ようと決心したのは、それまでの生活で身についた生活の垢とも云うべきシニズムを振りおとすためであった。

I was to all appearance cheerful and dutiful, but within I was cynical and almost totally bereft of sympathy for any other human being except the members of my family.<sup>(9)</sup>

友人から買い受けた、「ハナ」と名づけた中古車で旅をはじめたところ、  
「ハナ」は故障して動かなくなってしまう。偶然にも、場所はかつ

てノースが駐屯したことのある海軍基地に隣接する、ロードアイランド州ニューポートであった。アメリカ開拓以来の歴史を持つ、有名な避暑地であるニューポートには、ノース自身の思い出も深かった。そこで彼は遠くカナダまで旅するのをやめて、一夏をこの土地ですごすことに決める。彼は滞在の費用を生み出すために、子供達のテニスコーチや、語学の家庭教師や、病人や老人のために読書係りとなって、別の意味での旅を経験するのである。彼は老若男女、さまざまな人間達と知り合いになり、彼等の世界を訪問するのであるが、そこで知ったのは、大邸宅の住人達は決して外観通りに幸福ではない、どころか、どの人間も何かしらの不幸を負い、難問を抱えているのだ、ということであった。彼はこれ等の人々の不幸、難問の解決に力を借し、やがてシーズンも終る頃、シーズンの最後を飾る召使い達の舞踏会の夜、この土地を去って行く。その時になって、彼は自分のシニシズムが、いつの間にか消えてしまっていることに気がつくのである。中古車を受け取るためにガレージに立ち寄ったノースは、主人のデクスター氏に次のように云う。

“Sir, I came to this island a little over four months ago……

You may remember how light-headed I was, but underneath I was exhausted, cynical, and aimless. The summer of 1926 has done a lot for me.”<sup>(10)</sup>

ジョージ・ブラッシュの場合と同様に、ノースもまた、彼の行動そのものによって回復するのである。人間自身の中にある自己回復力にワイルダーは限りない信頼をおいているのであり、この点においてワイルダーはローマン主義者である。ワイルダーの作品中の人物は決して悪の存在となり得ないのは一つには、彼のこの信頼の念によるものである。

さて、ワイルダーは、この二作よりももっと静かな雰囲気のみちた作品の中にも、「散歩者」的性格を持つ人物を創り出している。処女作 *The Cabala*<sup>(11)</sup> の中でも、すでに、後の「散歩者」に発展して行くと見

られる性格を創り出している。中国西部の辺境の布教に従事し、大きな成果を収めた、ヴァイニ枢機卿である。彼の目的は名誉ではない。恐らく実践と行動に、彼の情熱はかけられていたのである。“Who can understand religion unless he has sinned? Who can understand love unless he has suffered without response<sup>(12)</sup>?”という言葉が、ヴァイニ枢機卿の性格をよく物語るものであろう。しかし、This missionary fever, however, did not entirely spring from piety. The boy, conscious of the great powers raging within him, had been throughout his youth insolent, contemptuous of his teachers and of his companions.<sup>(13)</sup> というヴァイニ枢機卿の性格にはまだ生硬さが残っている。作者自身の若さゆえの生硬さと云える。*The Bridge of San Luis Rey*<sup>(14)</sup> の中のアングル・ピオも初期の「散歩者」の一人である。スペイン貴族の庶子であると云われる彼もまた、行動そのものを愛する人物である。彼には名誉も金も必要ではない。それどころか彼には、a reluctance to own anything, to be tied down, to be held to a long engagement.<sup>(15)</sup> があったのである。それ故に、彼は一つの仕事を二週以上続けたことはなかったのだし、仕事を完成させたあとは、又別の骨の折れる仕事に従事せざるを得なかったのである。

「散歩者」をその行動に駆り立てるのは、人生をすっかりそのまま味わおうとする強い願望である。しかもその人生は、too wonderful for anybody to realize<sup>(16)</sup> であるこの世界の上で営なまれる人生なのである。

Ⅲ. Stage Manager: You not only live it; but you watch yourself living it.

Emily: Yes?

Stage Manager: And as you watch it, you see the thing that they — down there — never know. You see the future. You

know what's going to happen afterwards.

作家としてのワイルダーの到達目標は、一つには、作品の中で人生のすべてを見はるかすことのできる視点を得ること、人生のすべてを一眺のうちにさめることのできる高みに上ることであった。彼はこの試みに成功している。ジョージ・ブラッシュを戯画化しながら、それが決して冷笑に墮していないのは、ワイルダー自身のロマンティズムにあること、つまり、彼のうちにある人間に対する限りない信頼の念であることをさきに述べたが、その信頼の念の依って来るところは、彼の持つ一段と高い視点なのである。人間のうちにある能力を認めながら、同時に、人間は無知の闇の中をめぐら同然に動きまわっている存在、*spend and waste time as though you had a million years.* である存在なることも知っているのである。これは彼自身の体験によって達することのできた認識である。ワイルダーの人生のごく初期に、身を持って得た人生観は、強力な基盤となってその後の彼を支えている。すなわち、アメリカの批評家達がかなりの重要性を認めている、あのワイルダーの香港、上海での少年期の体験であり、その後のローマでの古代遺跡の発掘の経験である。父が香港、のちに上海のアメリカ総領事に任ぜられたために、ワイルダーの一家は、1906年に中西部ウイスクンシンから支那に渡る。1913年までの間に彼は北米大陸と支那大陸の間を二度往復し、帰国してからも、カリフォルニアのバークレイ高校を卒業後はオハイオ州でカレッジに入り、やがてニューイングランドのイエール大学に移って、この間に故郷と云えるほどの土地を持つことはなかった。イエール大学を卒業すると、ワイルダーは1920年から21年にかけて、ローマのアメリカン・アカデミーで考古学の研究に従事する。この間の経験が少なからぬ影響を及ぼしたことは、ワイルダーが *Theophilus North* の中で主人公に次のように云わせていることから明らかである。



Mr, Dexter, after I graduated from college I went to Rome for a year to study archaeology. Our professor took us out into the country for a few days to teach us how to dig. We dug and dug. After a while we struck what was once a much traveled road over two thousand years ago — ruts, milestones, shrines. A million people must have passed that way……laughing……worrying……planning……grieving. I've never been the same since. It freed me from the oppression of vast numbers and vast distances and big philosophical questions beyond my grasp. I'm content to cultivate half an acre at a time.<sup>(19)</sup>

彼の作品はバラエティに富んでいるが、それは彼の人生観、宇宙観をより効果的に示すための手段である。

ワイルダーは常に非常に閉鎖的な社会とその社会を構成する人間達を描く。多くの場合、彼自身の属する世界とは時間も場所も遠く隔る世界である。第一次大戦後のイタリアの没落しつつある貴族階級の作っている世界であり、18世紀初めの貴族制下のペルーであり、エーゲ海に浮かぶ一小島であったりする。時には彼自身の祖国アメリカを舞台にとるが、描かれるアメリカ社会は、恐らくは現実のものとは大きな隔りのある社会である。またある時には、寝台車の一輛が、そのまま一つの宇宙となる。興味深いことに、ワイルダーはこのような場所の地理的・風土的な特色を科学的に説明してくれるのであるが、しかもこの説明は読者に客観的な視点を与えてくれるのであるが、それにもかかわらず、というより、それゆえに、明確な説明をつけられた場所はより普遍的な一つの場所、nowhere であると同時に everywhere であるような、云わば一つの小宇宙と化してしまう。

The name of the town is Grover's Corners, New Hampshire  
—just across the Massachusetts line : latitude 42 degrees

40 minutes ; longitude 70 degrees 37 minutes.<sup>(20)</sup>

あるいは、

Grover's Corners lies on the old Pleistocene granite of the Appalachian range. …… A shelf of Devonian basalt crosses it with vestiges of mesozoic shale, and some sandstone outcroppings ;<sup>(21)</sup>

という説明は、ニュー・ハンプシャー州グローバーズ・コーナースなる田舎町を、そのような地理的・風土的特色を持つ地球上のある一つの場所と化してしまふ。恐らく、グローバーズ・コーナースという個有名詞さえ必要としない、人間の土地となる。

ワイルダーは、また、物語の舞台となる土地を、映画のカメラが写し出すように、遠景からやがて接近して大写しに写し出す。

The earth sighed as it turned in its course ; the shadow of night crept gradually along the mediterranean, and Asia was left in darkness. ……

The happiest, and one of the least famous of the islands, Brynos, welcomed the breeze. The evening was long.<sup>(92)</sup>

読者は一段と高い視点を与えられて、大きな風景の中に、ちょうど舞台の上の登場人物の動きを見るように、作中の人物を眺めることができる。そして、この視点は、動きに充ちているはずの人間の世界を、静止したタブローと化してしまふ力を持つことになる。時間は流れて行くものではなく、悠大な風景として示されるべきものであり、History is one tapestry.<sup>(22)</sup> なのである。変って行くのは、次々とあらわれては去って行く、登場人物たる人間だけなのであるが、その人間も、悠久な歴史の中では本質的には決して変ることのない存在であり、普遍的な存在なのである。

“Mr. North, one thing hasn't changed much——people!”<sup>(24)</sup>

マルカム・カウリーは、ワイルダーはその文学に対する態度において、ポープやアディソンにつながる<sup>(25)</sup>、と云う。「散歩者」達の創造によって彼の中に超絶主義者につながるものを見出すことができる、と先きに述べたが、とすると、ワイルダーをネオ・クラシカルである、と定義づけることができるのは、彼の作品世界の構成と視点の取り方によってではなかろうか。

Ⅳ. ワイルダーの作品の世界は、常に二元論の支配する世界である。愛と憎しみ、生と死、個別化と普遍化、そしてもう一つは、ロマンティックな傾向とクラシックの傾向である。しかし、これら一見対立すると考えられる概念は、決して対立するものではないことを、ワイルダーは彼自身の二つの視点によって教えてくれる。身近かなものを間近かに眺める目と、過去、現在、未来のすべての時間的な広がり、山の頂きから谷間に至る空間的な広がり、をすべてを望むことのできるような遠い、はるかな目、の二つである。間近かな対象を眺める目を持って眺めるとき、人間はまだ Just blind people<sup>(26)</sup> であるがゆえに、死は悲しい、不幸なできごととなる。人々は悲しみのあまり、亡き人の墓前に泣き伏さなければならなくなる。しかしより大きな、はるかな視界を得るとき、死は決して悲しむべきことではなくなる。死は死ではなくて形を変えた生であることを知るからである。墓前にひれ伏して泣くことは、That ain't no way to behave<sup>(27)</sup> である。間近かに眺められるとき、憎しみは愛と真向から対立する。しかし、遠くから眺められるとき、この世の愛も憎しみも共により大きな根源的な愛から出た、愛の衝動にすぎないことを知る。そしてそれ等はやがて、根源たる愛へと還元されて行くものであることを認識するのである。間近かに眺められるとき、人間は個々の個性が強調され、ちがいが目立つ。しかし、はるか彼方から眺められるとき、小さなちがいや個性は消えて、共通性だけが顕著な普遍的な存在

となる。このような視点に依って世界を捉えようとするときに、ワイルダーはネオ・クラシストとなるのである。One thing hasn't changed much — people! という信念が、時間と空間を超えた世界と、その世界に住む人々を、ワイルダーに描かせ続けて来た。The Bridge of San Luis Rey の大成功の後、新進作家ワイルダーは、古典ギリシャ時代のメナンドロスの作を下敷きにした、The Woman of Andros を世に送った。1930年、不況下のアメリカ人達が求めていたものとは、はるかにへだたりのあるこの作品は、マイケル・ゴールドのこっぴどい非難の的となり、その後ワイルダーは、高踏派、余裕派の作家と見なされることになる。彼自身はこの非難に対して沈黙を守ったのであったが、解答はおのずから明らかである。1935年の Heaven's My Destination はゴールドの非難に対するワイルダーの解答となる作品であり、当時ガードルード・スタインの絶賛を博した作品であるが、この後もワイルダーは古典に依る作品を書くのをやめてはいない。彼は云わば積極的に、時間、空間を超えた世界を描くことによって、人間そのものの解明にとり組んで来たのである。

ワイルダーの二つの視点は、人間の目と神の目、と云い換えることができる。有限をしか見ることのできない人間の目は、やがて永遠を見とおす神の目へと還元されて行く。すなわちエマスンが説くように、『万人の個別的な存在をことごとく内部にふくみ、ほかのすべての存在と一体にしてしまうあの「一なる者」、あの「大霊」へと還元されて行くのである。こうして、二元論に支配されているかに見えるワイルダーの作品世界には、本質的に対立関係にあるような二元論、は成立しなくなる。ネオ・クラシストとしてのワイルダーは、エマスンに源を発する超絶主義者としてのワイルダーとなってしまふ。そして彼の創り出した「散歩者」は、人間の世界を歩み出て、永遠に向って歩きつづける。

I didn't wait under the trees outside Mrs. Venable's cottage

to hear the Sousa march and the “Blue Danuve Waltz.”<sup>(28)</sup>

暗い夜の彼方に展開する世界があるはずである。希望の光は見えてい  
るのである。

Even as are the generations of leaves so are those of men ;  
the wind scatters the leaves on the earth and the forest buds  
put forth more when spring comes aroud ; so of the genera-  
tions of men one puts forth and another ceases.<sup>(29)</sup>

#### 註

- (1) Helmut Papajewski, *Thornton Wilder*, translated by John Conway, (Frederick Ungar Publishing Co., New York, 1968)
- (2) *ibid*, P. 18.
- (3) Malcolm Cowley, *A Second Flowering*, (published by André Deutch Limited, 1973).
- (4) Thornton Wilder, *Heaven's My Destinaton*, (Harper & Brothers, 1935).
- (5) Thornton Wilder, *The Woman of Andros*, (Albert & Charles Boni, Inc., 1930).
- (6) Thornton Wilder, *Heavens My Destination*, (Harper & Brothers, 1935). p. 294.
- (7) *ibid*. p.304.
- (8) Thornton Wilder, *Theophilus North*, (Harper & Row, Publishers, 1973).
- (9) *ibid*. p. 1.
- (10) *ibid*. p. 373.
- (11) Thornton Wilder, *The Cabala*, (Albert and Charles Boni Inc., 1926).
- (12) *ibid*. p. 151.
- (13) *ibid*. p. 55.
- (14) Thornton Wilder, *The Bridge of San Luis Rey*, (Grosset & Dunlap, 1927).
- (15) *ibid*. p. 153.
- (16) Thornton Wilder, *Our Town*, Act III.
- (17) *ibid*. Act III.

72 ソーントン・ワイルダーのアイデンティティ

- (18) *ibid.* Act III.
- (19) Thornton Wilder, *Theophilus North*, (Harper & Row, Publishers. 1973) p. 373.
- (20) Thornton Wilder, *Our Town*, Act I.
- (21) *ibid.* Act I.
- (22) Thornton Wilder, *The Woman of Andros*, p. 1.
- (23) Thornton Wilder, *The Eighth Day*, (Harper & Row. 1967) p. 396.
- (24) Thornton Wilder, *Theophilus North*, p. 373.
- (25) "Wilder Time Abolished" in *A Second Flowering*, by Malcolm Cowley, The Viking Press. 1973).
- (26) Thornton Wilder, *Our Town*, Act III.
- (27) *ibid.* Act III.
- (28) *ibid.* p. 374.
- (29) *ibid.* p. 370.

付 記

この稿を了えようとするころ、新聞紙上にソーントン・ワイルダー氏の訃が報じられました。

「ソーントン・ワイルダー氏（米劇作家）7日、米コネチカット州ハムデンの自宅で倒れ、救急車で病院に運ばれる途中、死去。死因は不明。78才。

代表作「わが町」をはじめ多数の舞台劇の作者として知られ、1928年に「サン・ルイス・レイ橋」で、また38年と43年にそれぞれ「わが町」と「危機一髪」でピューリッツァー賞を受賞した。（AP、UPI共同）」

10代のはじめに私は文庫本の『サン・ルイス・レイ橋』で作家ソーントン・ワイルダーと知りあったのですが、それ以来私はこの作家から有形無形の影響を受けて来ました。「ワイルダー」は私が外の世界に気づきはじめたとき、外を眺める窓となりました。人生や愛、死などについて思いを馳せはじめた少女にとって、『サン・ルイス・レイ橋』や『わが町』は、この上もなくよいテキストです。やがて、卒論のテーマに『サン・ルイス・レイ橋』を選び、修士論文に再度「ワイルダー」を選んだのも、10代はじめの出会いの意味の深さを物語ることになるでしょうか。拙い手紙にワイルダーさんから早速に達筆の返事を頂いたのは、修士論文に取りかかっていたころでした。「私はイギリス、ルネッサンス期の演劇、スペインの古典劇、中国の芝居、それから実際に見たことはありません

が、本で読んだ日本の能から、劇作の上でのヒントや影響を受けています」と答えて下さいました。

大きな樹が倒れて、憩いの木陰を失ってしまったようにも思える今、ワイルダーが作品の中で語ってくれる言葉の一つ一つがより一その重みをもって思いかえされます。

(1975年12月9日)